定価一部100円
第291号　昭和44年9月10日発行（毎月10日発行）

昭和44年（1969年）
9月号（No. 291）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本文
エベレスト登山許可の取得経過…… 1
第二次偵察隊出発あいさつ…… 2
エベレスト登山準備委員会発足…… 2
第二次偵察隊日程…… 2
駐日ネパール大使歓送会…… 3
ネ王国から登山許可を得た隊…… 3
新・釜蘭土雑記…… 4
日本山岳誌の略年表…… 4
日本学生山岳連盟の動き具体化…… 5
第十二回有志閑談会…… 5
英国山岳会への入会……吉沢一郎… 6
海外情報…… 7
会員通信
富山ヒマラヤ登山隊…… 8
シャートルから……松永敏郎… 8
パミール高原にて……安川茂雄… 8
ベルーへ出発……大貫良夫… 8
アルパイン・ジャーナルのこと…… 8
海外だより
ある英国隊からの便り…… 8
会務報告
臨時理事評議員会…… 8
第二次エ峰偵察隊員決定…… 8
昭和44年度除籍者…… 9
ルーム日誌……10
図書室便り
新刊図書受入報告…… 9
図書委員会報告…… 9
その他
ネパール研究会……11

エベレスト登山許可の取得経過

スキー隊との関係について

エベレスト委員会

本会がエベレスト登山の具体的な準備に入ったのは、一九六三年当時副会長であった三田幸夫氏がカトマンズを訪問し、一九六六年度の登山許可の内諾を得、ロイヤリティーの半額を支払った時にさかのぼる（会報一二八号参照）その後ネパール政府のヒマラヤ登山禁止令によって一時中断され、四年のブランクがあったが、昨年八月十九日の三十八座の部分解禁、本年三月十九日付の新登山規則の発行（会報一二八八号参照）によって初めて正規のルートが開けた次第である。

これに先立ち本会では一月十一日付エベレスト登山の意志表示を正式に文書でおくり、本年二月松方隊長をカトマンズに派遣し折衝に当らせたところ、四月四日付をもって左記の内容のエベレスト登山許可書がとどいた。

This has a reference to your letter dated January 11, 1969 to carry a mountaineering expedition to Mt. Everest.

I am glad that His Majesty's Government has decided to grant permission to the Japan Alpine Club to carry an expedition in the Everest.

Regarding the period for the expedition, the choice is open to you either for 1970 spring, or post monsoon or 1971 spring.

……(中　略)……

Now it is up to you to decide. In any case, whatever decision you arrive at, may be conveyed to this Ministry at the earliest possible.

ところがこれと平行して日本エベレストスキー探検隊（Japanese Everest Skiing Expedition 隊長高橋照氏）にも、二月十九日付をもってエベレスト地域でのスキー滑降と、映画撮影を目的に許可が与えられた。この内容は次のようなものであった。

With reference to your letter dated 9th, February, 1969 I am glad to inform you that His Majesty's Government has granted permission to the Japan Science Foundation to carry Skiing expedition in the Everest region, for the first team of 10 from September to November 1969 and Second team of 20 from February to June 1970 on the following conditions which you have agreed

……(中　略)……

Expedition party will in no case make an attempt to climb any peak in thet area, Since the expedition is considered to have its object as purely skiing and sport.

これらの状況から本会としては、ネパール政府の許可条件が、一方は登山、一方はスキーとはっきり区別されていることから、与えられた最初のチャンスを選び一九七〇年のプレモンスーンを選んで、その旨ネパール政府に通報すると共にネパール政府の登山規則に従い、直ちにアプリケーションを提出したわけで、その直後に派遣した第一次の偵察隊も七〇年本隊を前提として正式に入山が許可されたこともご承知の通りである。

ただネパール政府としてはスキー隊には先に許可を与えているので、JACはスキー隊と連絡するようにという要望があったので、この件に関し、六月十九日駐日ネパール大使館において、パンダリー大使、シャハ一等書記官立会いのもと本会側―三田、日高、辰沼、大塚、松田、神原、スキー隊側―高橋、中野、高島、三浦、松下、古村の各氏が協議し、一九七〇年春には、スキー、南壁登攀の両隊が成功することを前提に、今後話し合いをつづけていくことの覚書を調印した。この内容は次の通りである。

Under the auspices of and upon the invitation by Mr. Bharat Raj Bhandary, Ambassador of Nepal, both Japanese Everest Skiing team and Japanese Mt. Everest Expedition team from Japan Alpine Club have agreed to continue the necessary negotiations among them to find out facts whether both parties can carry out their objects without risks. Both parties hope to be able to carry out their respective expedition in early 1970 by mutual agreement to be reached after more discussions.

これに三田会長、高橋隊長がサインし、その後もこの会合はつづけられ、スキー隊からの十五項目の質問状がだされ、これに対し、JACから回答書を出すということもあった。

しかしながらこれらの会談は常にJAC側は二隊両立可能を主張し、スキー隊側はJACの隊がきてもらうと困まるというような気持ちがあるため、平行線をたどることが多かった。しかしともかく同じJACの会員が同じ谷へ入るのであるから、できるだけよく打合せ、相互に扶助していこうとの精神で、本会はアプローチをつづけていた。

しかしその後「スキー隊が正式許可で、登山隊は内諾である」とかいうさまざまなニュースが流れ、一部の新聞には「外務省、日本山岳会エベレスト隊の無許可登山に警告」という誤報もあって、会員各位にもご心配をおかけすることになり、八月の臨時理事評議員会の席上でも、この間の事情は明確に発表すべしとの意見がだされた。

そこで本会としても、この間の事情を明確にする必要があるとの判断から第二次偵察隊員の佐藤之敏隊員を先発として派遣し、この関係の折衝に当らせた。佐藤隊員は、七月二十五日羽田発、現地で本会々員の宮原巍氏と協力してネパール政府と交渉に当ったところ、ネパール政府としては、四月四日付の許可書を正式許可と認める見解をとっていることが確認され、本隊ならびに第二次偵察隊の許可も八月五日

付左記の通り正式に入手することができた。

Dear Mr. Matsukata,

Please refer to your letter dated July 24, 1969 regarding your second reconnaissance party to Sagarmatha during post monsoon 1969 in connection with your expedition to the said peak in the premonsoon 1970.

In this connection, I have the pleasure to inform you that His Majesty's Goverment has finally approved your preference to carry out the expedition to Sagarmatha in pre-monsoon 1970. So you are requested to make necessary arrangement between yourself and Japanese Everest Skiing Expedition Party in order to carry out both expedition, side by side, without creating any disturbance, confussion and trouble to either party. I hope you will be pleased to know that His Majesty's Government has also decided to grant permission to carry out your second reconnaisance party during August to December 1969.

……(後 略)……

これでこの許可問題は解消したことになるが、理事会ならびに毎日新聞社の要望もあり、本会より、今西寿雄評議員、大塚エベレスト登山担当理事(毎日新聞佐藤茂記者同行)を八月十五日、カトマンズへ派遣した。

今後はスキー隊と協同して両隊の成功を期するのみである。

なお、本会の計画については、毎日新聞社、NHK、文部省、外務省が前回と同様正式に後援を決定しており、その他、電子通信学会、日本地球電磁気学会、日本雪氷学会(予定)、日本山岳協会などの後援も決っている。

エベレスト登山
準備委員会発足

エベレスト登山の準備については、会員各位から広く公募を行なってエベレス登山の準備を行なうことになったことはご承知の通りである。

本会では七月一日から向井ビルの四階にエベレスト登山準備委員会の事務所を設け、七月十二日～十三日の両日、第一回の準備委員会を招集して、準備のスタートを切った。

六月末日で公募を締切ったところ、百名に達する希望者があり、これにエベレスト委員会から依頼した方も加え計百二十七名に達した。準備委員会ではこれを十部門に分けて準備をすすめることにした。この分担は次の通りである。(◎印は各部門の責任者、順不同)

〔総務〕辰沼広吉、大塚博美、松田雄一、加藤泰安

〔企画〕辰沼広吉、村木潤次郎、大塚博美、松田雄一、藤田佳宏、中島寛、加藤泰安

〔事務局〕◎中島寛、池田錦重、須田紀子、相沢裕文、宮原巍、神原達、神崎忠男、植村直己、佐藤之敏、小方全弘、村関利夫、佐々木惣四郎、野上成勇、原真(東海支部連絡)田中元(東海支部連絡)

〔包装〕◎大森弘一郎、錦織英夫、長田義則、遠藤泰司、成田潔恩、八島晃、池知昭洋、千谷壮之助

〔医療〕◎辰沼広吉、長尾悌夫、大森薫雄、斎藤淳生、中島道郎、広谷光一郎、三方淳男、関章司、小池恭弘、徳永篤司、岡部紀正

〔装備〕◎川上隆、塚越雅則、金坂一郎、加藤喜一郎、片桐理一郎、安田武、高橋進、川崎厳、平野真市、小沢明夫、田村宏明、今村千秋、吉川昭、川田哲二、神山義明、浜野吉生、高橋善数、木村紀夫、市川正、竹田寛次、嵯峨野宏、橋本清、菅沢豊蔵、渡部節子、車義久、服部満彦、小暮勝義、飯塚誠一、高橋正彦、青木敏、大須賀浩、田代儀雄、松島利夫、竹内博美、相田克己、小西政継、菊池修身、千葉重美、松永敏郎

〔食糧〕◎宮下秀樹、山野井武夫、土肥正毅、作美修、上田富雄、山本良三、亀井英二、鹿野勝彦、節田重節、安藤千年、出田興生、中村進、相田昭、青柳一雄、望月晃、西村一夫、長谷川慈典、原博貞、岩瀬時郎、石塚誠之輔、西丸震哉、加藤勝義、日下田実、石坂昭二郎、小島甫

〔気象・通信・地球物理〕◎芳野赳夫、山田二郎、武正英、河野長、野崎裕美、樋口明生、井上治郎、小栗孝康、長田正行、安間荘、遠藤満一、田中正智

〔酸素〕◎住吉仙也、平林克敏、加納厳、田辺寿、山田靖則、岩坪五郎、牧野内昭武、吉岡義彦、和田豊司

〔写真〕◎木村勝久、八島晃

第一回準備委員会

▽七月十二日～十三日、出席者75名
・準備委員会の任務分担・各係の準備方針検討・第二次偵察隊の具体的準備検討

第二回準備委員会

▽八月二日、出席者67名
・第二次偵察隊員発表・スキー隊の関係につき説明・第二次偵察隊の準備報告

第三回準備委員会

▽八月十六日、出席者57名
・南壁登攀についての検討・第二次偵察隊との打ち合わせ
なお準備期間中は、連日30名くらいが来室準備に当った。

第二次偵察隊日程表

▽先発隊
8・20 宮下以下七名十三時二十分JAL四七一便で羽田発(デリー泊)
8・21 宮下以下七名十六時十五分カトマンズ着佐之敏隊員と合流
8・25～30 宮下以下六名、空路荷物とともにカトマンズ―(空路)―ルクラ―(キャラバン)―ナムチェバザール(休養、高度順化)
後発隊二名、通関のためカトマンズ―カルカッタ
9・7～13 ナムチェバザール発(キ

謹啓　会員各位にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本会懸案のエベレスト登山計画もいよいよ明年春に実現の運びとなりましたが、このたび、私たち八名は第二次偵察隊隊員として選ばれ、八月二十日、午後一時二十分JAL四七一便にて羽田を発ち、ネパールに向かうことになりました(スケジュールは別表のとおり)。

ウェスタン・クームから八八四八メートルの頂上までまっすぐに突きあげている高距二三〇〇メートルのエベレスト南壁―この未踏の岩壁をたどって頂上に立つというのがこのたびのエベレスト登山計画の根幹であります。

したがって私たち偵察隊の目的は、これまで誰も手を触れたことのない南壁に実際にとりつき、南壁の実態およびそれをとりまく様々の条件を自分たちの体験を通じて確かめ、何とかして登頂ルートを見出してくることだと考えております。

八〇〇〇メートルをこす高所の岩登りはこれまでほとんど試みられたことがないだけに、未知の要素が多く、きわめて難しい問題が山積しておりますが、私たちとしては、慎重に、しかし果敢に、なるべく高く登ることに全力を集中し、できうれば八〇〇〇メートル地点に前進キャンプを設け、酸素ボンベ二本を携行したアタック隊二名が、そこから更に上部のルートを開拓して登頂の見通しを明確にしてきたいと考えております。

今回の準備につきましては、実に多くの方々のご支援とご高配に預かりました。とくに、日夜を分かたず諸準備を推進していただいた準備委員会の百数十名の諸氏には何とお礼をいってよいかわかりません。

この上は、隊員一同健康と細心周到な行動に留意し、皆さま方のご期待にそえるよう努力したいと存じます。

出発に先立ち、謹んでお礼申し上げるとともに、今後とも一層のご支援を賜わりますようお願い申し上げます。

敬具

昭和四十四年八月十八日

エベレスト登山第二次偵察隊
隊　長　宮下秀樹
副隊長　田辺寿
ドクター　大森薫雄
隊　員　中島寛
小西政継
植村直己
佐藤之敏
井上治郎

◎現地連絡先
c/o Embassy of Japan, Kanti Path, Lazinpat Kathmandu, Nepal.

△　△

ャラバン)―B・C建設
後発隊　ウェリントン丸カルカッタ着を迎える
9・15～10・6　アイスフォール工作開始、B・C集結
後発隊　カルカッタからB・Cへ
10・10～11・10　宮下以下八名全員で本格的登攀活動
11・15　B・C撤収
11・20　カトマンズ帰着
11・25　帰国

ただし越冬隊三名(未定)は科学観測ならびにシェルパの養成、訓練を行なうため、ナムチェを中心に十一月十五日から三月十五日まで越冬。

× × ×

駐日ネパール大使歓送会と富士登山

四年前に初の駐日大使として赴任されたバンダリー大使は、このたび本国での重要な任務につかれるため八月十九日帰国されることになったので、本会では、着任されたときと同様日本ネパール協会と共催で、去る七月二十八日、麻布国際文化会館において歓送会を開催し、その労をねぎらった。

会は日ネ協会川喜田専務理事の司会によりはじめられ、まず日ネ協会日高会長が、多年に亘る日ネ親善に対する努力に対し労をねぎらい、次いで本会三田会長が、日本からの多くのヒマラヤ登山隊に対する好意あるご協力に謝意を表し、あわせて目下計画中の本会エベレスト登山に対する大使の格別のご配慮に感謝の意を表し、七宝の花瓶を贈呈した。

次いで大使の希望により翌二十九日～三十日、富士登山を行った。これは日ネ親善富士登山(大使は、Nepalese Mt. Fuji Expedition といっていました)で、ネパール側、バンダリー大使、長男デパック氏、アデカリ事務官の三氏、日本側からは、本会エベレスト登山準備委員会より、大塚、宮下、植村、鹿野、井上の五名が参加した。二十九日は山麓の富士ビューホテル泊。翌早朝出発、元気に富士登山を行ない、夕刻無事下山した。

× × × ×

これに対し七月大使より左記のような礼状が届いた。

七月二十八日に国際文化会館で日ネ協会と共催で、私共の歓送会を開いて下さいました貴殿と日本山岳会の各位に、感謝をこめてこのお便りを差し上げます。日本山岳会からお贈り下さいました美しい花瓶は、これをみるたびにいつも貴会の皆様のことを思い出すことでしょう。

また私が貴国に着任以来四年間、貴会の各位から受けました、ご助力とご協力に対しても御礼を申上げ度く存じます。お陰様で妻共々滞日中は、楽しく過させていただきました。

また貴殿の親初なご助力をもって七月二十九～三十日に行なった富士登山は、実に楽しい想い出となりました。ご一緒に登って下さった大塚、宮下、植村、鹿野、井上の皆様に宜しくお伝え下さい。富士登山は、全く簡単なものと思っていましたが、どうして私にとってはそう簡単なものではありませんでした。しかし私の息子のデパックはそれほど難かしくはなかったようです。われわれは登山を楽しむことができ、本当に楽しい想い出ができました。親切な登山靴のアレンジやホテルのアレンジなど貴殿と貴会には重ねて御礼を申上げたく存じます。

七月三十一日、ネパール大使
B・R・バンダリー
日本山岳会会長　三田幸夫殿

解禁後ネ王国から登山許可を得た隊一覧表

(一九六九・八・一五)

ネパール政府は新登山規則発表前に暫定的にドイツのアンナプルナ登山隊に許可を与え、また登山許可ではないが、日本エベレストスキー探検隊に対し、スキー滑降と映画撮影の許可を登山許可に準じて与えていたが、登山規則が三月十九日に施行されてからは、四月上旬、七月上旬、八月上旬の三回にわけて合計二十五隊に対し登山許可を与えている。

駐ネ日本大使館から日本外務省を経由して本会宛に届いた資料をもとにこれをまとめてみた。ただし八月上旬には他にも数隊に対し許可が与えられている模様であるが目下のところ不詳である。いずれ詳細がわかり次第追加したい。

なお日本からは十五隊が申請しているが、早大ローツェ、福岡山の会のダウラギリが他国と競合して許可にならなかったほか、目下信州大学のミルギリ南峰、慶応大学山岳部のラメジュン・ヒマール、女子登攀クラブのアンナプルナⅢなどが申請中である。

List of The Expedition party granted by His Majesty's Government of Nepal

①Germany, Annaprna I German, Alpine Club, Mar-May 1969. Date of permission Feb. 1969.

②Japan, Makalu(Reconnaissance) The Japanese Alpine Club Tokai Section, Dr. 松浦正司, Member 5, Mar.-May 1969. 許可時 Mar 1969.

3月16日カトマンズを発ち、ルート偵察後5月26日カトマンズ帰着

③America, Dhaulagiri I, American Alpine Club, Mr. Boyd N. Everett Member 10, Apr.-June. 1969, 許可時 Apr. 1969

4月28日雪崩により隊長以下隊員5名、シェルパ2名の死者を出した。生存者は登山活動を中止して帰米

④British,Kanjiroba 22,580 ft.,Mr. John Tyson Member 6 Apr.-June. 1969 許可時 Apr. 1969

悪天候のため失敗した

⑤Swiss, Tukuche Peak,Dr. George Hartmaun, Member 5, Apr.-May 1969 許可時 Apr. 1969.

5月10日登頂に成功した

⑥Japan, Everest Skiing Expedition 日本科学技術振興財団 高橋照 Post-monsoon, Feb. 1969 and Pre-monsoon 1970.

⑦Japan, Makalu 日本山岳会東海支部, 伊藤洋平, Member 12 Pre-monsoon 1970 許可時 June. 1967

⑧Japan,Everest(Reconnaissance) 日本山岳会 藤田佳宏 May-June. 1969 Member 4. 許可時 Apr. 1969

⑨Japan, Everest 日本山岳会 松方三郎, Member 35 Pre-Monsoon 1970 許可時 Apr. 1969

⑩Italia, Churen Himal, Italian Academic Alpine Club Post-Monsoon 1969, 許可時 Apr. 1969

⑪Japan, Manasulu Ⅱ (peak 29) 大阪大学山岳会 住吉仙也 Member 8 Sep.-Nov. 1969 許可時 Apr. 1969

⑫Austria,Dhaulagiri Ⅳ Österreichische Himalayan Expedition Post-monsoon 1969 許可時 Apr. 1969

当初の偵察の計画を秋に延期

⑬Italia,Dhaulagiri Ⅲ Club Alpino Italiano May-Aug. 1969 許可時 Apr. 1969

一年延期

⑭Italia, Dhaulagiri V.Beilla Club Alpine Jan.-Apr. 1970 許可時 Apr. 1969

⑮International, Dhaulagiri Ⅱ, International Dhaulagiri Mountaineering Team, Col. James Robert Jan.-Apr. 1970 許可時 Apr. 1969

⑯Austria, Lhotse, Austrian Alps Association Pre-Monsoon 1970 許可時 July, 1969

⑰Japan, Patrasi Himal 神戸商大 Post-Monsoon 1969, 許可時 July, 1969

⑱Japan, Dhaulagiri Ⅳ, 関西登高会 Pre-Monsoon 1970 許可時 July, 1969

⑲British, Annapurna British Army Annapurna Expedition 1970 Pre-Monsoon 1970 許可時 Jaly, 1969

⑳Italia,Dhaulagiri Ⅲ,Club Alpino Italiano Pre-Monsoon 1970, 許可時 July, 1969

㉑Japan, Gurja Himal, 泊山岳会 Post-Monsoon 1970 許可時 July, 1969

㉒British, Annapurna Ⅰ Mr. E. Bonington Pre-Monsoon 1970, 許可時 July, 1969

㉓Japan, Everest (2 nd Reconnaissance) 日本山岳会 宮下秀樹 Post-monsoon 1969 許可時 Aug. 1969

㉔International, Everest Dr. N. Dyhrenfurth Pre-monsoon 1971 許可時 Aug. 1969

㉕Germany,Everest Pre-monsoon 1972, 許可時 Ang. 1969

(7ページへ続く)

新・爺蘭土雑記

藤島敏男

発端　ニュージーランドといえば、八年前（一九六一年）、佐藤テル女史（会員）が、女軍（森、後藤、川井、田村）をひきい、四ヵ月にわたり南北両島くまなく駆けめぐってきた。その報告は「山岳」第五十六年にのっているが、表向は親善だが、第一目的は登山という、つまり法衣の下に鎧を着込んだような格好だったらしい。

しかし法衣と鎧とを巧みに使いわけて、N・Z中に友人知人を作り、山登りの方も充分成果をあげてきた。これらの山はみんな〝日本人として〟初めてのものだが、報告の中には〝日本人として〟という、私の大嫌いな文句はひとつもない。

一体いつごろから、このなんとなく民族的コンプレックスを感じさせるような言葉が、使われ始めたのであろう。たとえばソビエト・ロシアの登山者が、日本へきて剣岳のどこか岩場を登った場合、ソビエト人として初めてなどという表現をするだろうか、こう考えてみればすぐ分かることだ。あまり日本人々々と、イキリ立つのはやめてもらいたい。

さて佐藤女史帰国後、話をきき、スライドをみて、N・Zは好い国で、素晴らしい山もあるということは、充分わかった。こんどゆく時は夫妻で出かけるから、われわれも夫婦で同行しないかと、誘いをかけられたのだが、一寸先は暗みたいなこの国では、あまり遠い将来のことは約束できないから、生返事でゴマ化しておいた。

計画・メンバー　それからも時々N・Zゆきのことは、話題になった。私は出かけるなら、N・Zへ旅をたのしみにゆくので、空港からイキナリ山麓へ、山小舎からテント、雪洞、ビヴァック、登山がすんだらその足で空港へ、そして帰国、そんな芸当はできないし、したくもない。美しい国をゆっくりと歩き、ところどころで山にも登り、山頂のひとときを楽しむようなことができれば、と考えもし希望として話したこともあった。

昨年（43年）の春ごろから、佐藤女史のN・Z中の知己との連絡が開始されたらしく、八月のはじめ、大体の計画が出来たからと、呼出しがあった。

南島のクライストチャーチから、二台のレンタル・カーに分乗して、山班と平地班とは、ついたり離れたりしながら、南島北島に約四週間を過ごすというもので、至れりつくせりのプランだから、私などはロクに内容もみないで、結構々々、万事頼みますよと、佐藤夫妻に下駄をあずけた。馴染のうすい地名など読んだって、頭に入らないから、向うへついてからのことと、高をくくっていた。ほかの連中も大したちがいはないようだった。

旅の道連れは、佐藤夫妻、深田久弥、吉田俊二（会員）夫妻、藤島夫婦、それに山がすきでハンドルのとれる巽、坂井の二青年、同勢九人である。まずこれでホテルの食堂でも、野郎ばかりの仲間が胴間声に、豪傑笑いで、まわりからヒンシュクされるようなこともあるまいと安心した。

支度　出かけるのが一月中旬、南半球の真夏だから、山用も平地用も支度は至って簡単である。シェタイクアイゼンは例によって加藤泰安会員から借用、山小舎泊りのために三辺夏雄会員が、軽るいフランス製の羽毛服と半寝袋を貸してくれたが、これは向うで使う必要がなかった。ベントのピッケル、いつも使ってるステッキ、その他の小道具類、古物ばかりで新調したものはない。登山靴で飛行機にのる手もあるまいと、荷物の中におさめたが、それでも一人前二〇キロにはならなかった。

出発　出かけるときまってから、出発まで約半年あったが、触れまわるほどのことでもないし、殆んど誰にも言わないから、一月十五日（昭44年）羽田へは、見送人などひとりも来ない。

だいたい私は見送出迎が大嫌いで、旗やのぼりを押したてて、大合唱などというのは、民度の低さを示すものだとおもうから、私自身そんな阿呆な真似はしたことがない。もっとも旗や歌声の見送りが盛大なのは、自分の声望によるものと得意になる人もないとはいえない。羽田空港からそんな風景が一掃されるには、まだまだヒマがかかるだろう。

到着　香港、ブリスベーン、シドニー（大谷一良会員と寸刻面談）と乗り

日本山嶽志の略年表

藤島玄

「郷土史にかがやく人々」の一人に故高頭仁兵衛翁の伝記を書くことになったので、「御国の咄し」「日本山嶽志」をもとに、二、三の参考資料をみながら、日本山嶽志の略年表を手控いしてみた。時代は明治である。

三一年　八海山を登り登山禁止令が出秋結婚、地誌類の資料を集め始める。

三四年　夏「山水私記」できる。項目を山嶽・渓澗・河渠・湖沼・原野・瀑布・鉱泉とし、参考資料は約六千種三万冊、地図約二千葉。「名山綱」に着手。

三五年　夏「名山綱」出来る。山嶽に関せる者を採録し寸紙断片積んで一千三百山に及ぶ。

三六年　冬「名山綱」よりさらに精選した「日本名山鈔」出来る

二七歳　山嶽表八百枚を書き直す。

三七年　志賀重昂が訳読する「ハンドブック・フォア・ジャパン」を約二週間筆録し、小島烏水に増補を依頼して快諾を得。

二八歳

三八年　秋一〇月「山岳会」が結成され高頭は発起人の一人となる。「日本名山鈔」を「日本山嶽志」と名を改め博文館で印刷中。

二九歳

三九年　二月四日発行、部数は三千冊定価金二円。皮表紙、三方金、内扉金文字特製本四冊あり、皇室、閑院宮、妻の父親、自家用である。

三〇歳

高頭翁が十年かかったというが、実際は七年で原稿ができ、印刷発行に約二年の計九年である。年令でいえば二十二歳から二十九歳の若さと、煙火製作中火薬の爆発で一生の不具となった両眼と右手親指の故障に堪えて、和罫紙に毛筆で書いたというから驚く。

この「日本名山鈔」が三十七年に成ったことに注意しておいて、翁が参考資料にあげた本は志賀重昂「日本風景論」小島烏水「日本山水論」雑誌「文庫」「太陽」が見え、谷文晁「名山図会」吉田庫太郎「大日本府県志」富本時次郎「帝国地名大辞典」等が見られる。

さらに「引用書名略号」によると、（地辞）「大日本地名辞書」とある。この（地辞）は、同じ新潟県人の吉田東伍文学博士が一生を通じての業とした歴史と地理の集大成で、明治三十三年第一冊上発行、三十七年第四冊下を発行して、ここまでに本土は終っているから、可なりの参考になったと思われる。ここまでの頁数四七五二で、発行所富山房も空前の大著であろう。

この「地辞」の最初の発行から、逐次もっとも参考になったと思われるし同県人の旦那様同志として何等かのつながりもあったと思われるが、どういう訳か一言も吉田博士の「大日本地名辞書」にふれていないし、生前に翁からそのつながりなど聞くことにも気がつかないで終ったのは残念である。

同じような辞書でも、目的にかなりの相違があるので、今になってその山岳についての精粗、寡多を比較しても始まらないが、とにかく大変な辞書が出たものだと噂になったに違いない。あるいは臆測ではあるが、最初の多項目の中から「山嶽」のみにしぼって、「山水私記」から「名山綱」へ転じたのも、この「大日本地名辞書」の発行があったからではあるまいか。この辺の裏話を、武田先生にうかがってみたいものである。

試みに新潟県内の山を比較すると、「地名辞書」に約六十五座。そのうち「山嶽志」に記載ないもの十九座。主なるものに南葉山塊の山々、三国山脈に大剣田山、割引山、飯豊山塊の杁差岳などである。

「山嶽志」は約八十三座、そのうち「地名辞書」に記載のないもの約四十一座。主なるものに白馬連峰の朝日岳、三国山脈の駒ガ岳・荒沢岳・牛ガ岳・千ノ倉山・大鳥未丈ガ岳・川内山塊の五剣谷岳・闇見岳・飯豊山塊の烏帽子山・疣岩山・蒜場山などがある。

日本山嶽志編纂主旨の最後に「吾ガ同好者ハ均シク余勇ヲ鼓テ、人跡未ダ到ラザル「ひまらや」ノ最高巓ニ踞シ、以テ天地ヲ小トセン、豈ニ曠世ノ快事ニ非ラズヤ、而シテ余ガ編纂ノ意ココニ至リテ尽ク」と記している。

∴　∴　∴　∴　∴

ついで、十六日午後南島クライストチャチ着。空の旅は呆気ない。通関きわめて簡単、誰かの平地用黒靴の底についていた、極東日本の泥が目にとまって、バイキン潜入のおそれからか、洗い清められたのが印象にのこった。

税関を出ると、ノーマン・ハーディ君がヒゲ面で（九年前来日の折はヒゲはなかった）迎えてくれた。車寄せには夫人と長女のジェーン、二台のレンタルカーが横付けになっているという寸法、すべてノーマン君の配慮によるものだった。

街から山へ　英国風の古雅な味が建物にも道路にも公園にも感じられる、クライストチャーチはどこへ行っても、清潔で静かであった。人間の数が少いことが、私をよろこばせた。

ガーデン・クラブの夫人達に案内された住宅街などは、広々とした花園の中に、思い思いの家があり人が住むといったようなもので、極東の女連はただ溜息をつくばかりだった。

ハーディ家でのビュッフェ・スタイル・パーティーには、カンタベリー・アルパイン・クラブの面々に夫人連も加わり、中には名刺に日本字で姓名を印刷させたK・D・マーラァル君という知日家などもいて、大層にぎやかであったが、横文字の不得手な私には難行苦行だった。近頃気軽るに海外へ出る連中ならば、こんな場合に不自由なく外国語をあやつって、交歓の実をあげるのだろうと、自分の無学を残念におもったことだ。

ハーディ君の義兄にあたるハースト君の、海辺の家に招かれた日は、裏山に登ったり、ヨットにのせて貰ったり、八年ぶりで見違えるように成長した子供達と、テル女史は再会を喜んだり、本当にたのしい一日であった。海は綺麗で浜辺に人影は少く、湘南海岸今夏最高の人出の図をみせたならば、N・Zの人は、オー！　といったきり、卒倒しかねないとおもう。

ハーディ君の山荘へ向う日も晴れた日であった。町を離れると、すぐに牧場、畑が広々とつづいて、林をぬけるとまた牧場、羊が余念なく草をたべている。めったに村も町もない、のびやかな風景に感心したものだが、これはN・Zに在るあいだ、どこまでいっても変らなかった。

ポーターズ・パスに近くなると、五六千呎の山だが、雪を帯びて、中には岩骨稜々といったのも姿を見せる。山荘はワイマカリリ海の右岸、コラリン河原どでもいった、ひろびろした草原の一角にあった。真正面にドーム（六六四〇フィート）が高く望まれる形勝の地だ。全くの一軒家、あたりに人の気配もない。牧柵がエンエンと延びているから、どこかに羊はいるのだろう。川上には小さいながら氷河を抱いた山が連なっている。

部屋割り、荷物の整理、にぎやかなひるめしがすんでから、裏山へ登る。深い林をぬけて、山荘が見おろせる草付まで一時間も登ったろうか。八年前、クロー小屋から取付いたロールストン（七四五三フィート）の氷河を遠望して、テル女史は感慨深い様子だった。

この山上から、山荘に残ったエニッド夫人と、ウォキー・トーキーで、ふたりのお嬢さんが会話したのは、余程ハーディ一家の興味をひいたらしく、後日われわれ一同の名において、贈呈することになったのだ。

ビーレイ登山

あくる日は国立公園区域のマウントビーレイ（五九八〇フィート）へ、深、藤、巽、坂の四人に、ノーマン君、ジェーン嬢（12歳）、英国から来ている二十歳位のお嬢さんと、七人で登った。勿論、山というほどのものではないが、深い森林から草付へ出て、残雪を踏み、岩尾根にかかり、頂上まで四時間の登りだから、物足りないどころではなかった。

山上の展望をゆっくりたのしんでいると、ケア（マウンテン・パロット、暗緑色の大きな鳥）が十羽近くも、けたたましく啼きながら舞いおりて、われわれのすぐ近くまできた。ノーマン君がピッケルの石突で擦音を出すと、不思議そうに益々近よってくる。馴れているというより、人をおそれないのであろう。大和民族に始めて見参、珍らしがったのかともおもったが、どこの山でも寄ってくるとの話だったから、ケアは人種差別をしたわけではなかった。

登る途中で、これがN・Zエーデルワイスだと教えられた、可憐な花を一輪でもほしいとおもい、ノーマン君に伺いを立てた。よろしいと言ってから、自分は国立公園運営委員で、レンジャーも兼ねている、その許可が下りたのだから大丈夫と笑っていた。あとで採集品を示したら、茎の先きだけ切って、根を残してあるから、来年はまた芽が出るとほめてくれた。

N・Zエーデルワイスは、ウスユキソウによく似ているが、葉がまるでちがう。南半球にエーデルワイスはないと、武田博士から教えられたことを、ここに書添えておこう。

下山の途中、森林帯で少年少女も交じえた七、八人のグループに会った。それから間もなく、路傍にオレンジの皮が落ちていた、その近くで枯木を押倒した跡があった。ノーマン君は、これは大問題、チーフ・レンジャーに報告しなければと、カンカンになっていたが、そのくらい、山は清潔に、自然に保護しよう、という気持が徹底しているのだ。

ほかに気付いたことは、山へかかる所に「マウント・ビーレイ・トラック」と赤地に白字の道標が一本あったきりで、頂上まで何の標識もない。頂上にたとえば「中部山岳国立公園・朝日岳」といった、丸太作りの目障りな大看板の如きもののないことは、いうまでもなかろう。深い林の中をゆく路の手入はよく行届いて、雨水にえぐられるような個所は、小丸太を埋めて、滑り止めの金網が巻いてあった。日本の丸木橋などに応用してみては、どうであろう。

アーサー・パスの村で、合流した平地組は、滝を見物したり、花を摘んだり、林間を逍遥したり、たのしい一日だったようだ。そろって山荘へ。その夜はフェーヤウェル・ディナー。

一月二十一日、ハーディ一家の好意と厚遇に、ありったけの謝辞と別辞を述べ、さわやかな朝風におくられて、私達はN・Z南島行脚に旅立ったのである。

（つづく）

日本学生山岳連盟の動き具体化

大学山岳部間の親睦をはかり、また共通の利益を守るために大学山岳部の全国組織を設立しようという動きが日本山岳会学生部を中心に進めてきたがこれが実を結び「日本学生山岳連盟」（仮称）として具体化されることになった。

現在北海道、関東、東海、関西などの地区ブロックと、各地の大学山岳部を合わせて六十校ほどがその趣旨に賛成し、参加の意志を表明している。

今後の予定としては、九月中に設立総会を東京で開催し、ただちに日本山岳協会へ加盟申請の手続を取りたいと考えている。将来はこれを母体として組織の拡大をはかり、上記の目的を達するとともに、海外遠征などのための資料センター的な役割りを果していきたいと思っている。会員皆様の御支援をお願い申し上げる。

第十二回有志閑談会

第十二回有志閑談会は六月十四日午後四時から駒込の六義園心泉亭で行なわれた。定刻前から常連の顔ぶれがぼつぼつと集まり、静かな公園の緑を楽しみ、記念撮影をした。

ことしは、いつもお見えになる近藤茂吉さんのお顔が見られなくなったのは淋しかったが、田部さんが相変らずお元気に出席され、楽しい集まりとなった。来年の世話役は小原晴子、藤井運平、山崎安治の三氏にお願いすることになった。

▽出席者　田部重治、岩永信雄、日高信六郎、瀬名貞利、成瀬岩雄、島田巽、足立源一郎、中河与一、深田久弥、桜井信雄、斎藤桂、伊倉剛三、野口末延、山崎金次郎、鶴岡元之助、名児耶達男、永原輝雄、川森左智子、坂倉登喜子、古沢肇、小原晴子、今井雄二、諸岡一次、名須川浩、吉田久兵衛、今井喜美子、山下一夫、松方三郎、沼倉寛二郎、村井米子、藤島敏男、佐藤久一朗、小原勝郎、辰沼広吉、山崎安治

ビールパーティの報告

七月十七日にルームで行なわれたビールパーティは、丁度梅雨もあがり、暑さも酷しくなりかかって来、六十余名の方々が参加され、会員の勝田房治氏の手品の余興もあって、賑やかな宵を過しました。おかげさまで九月末に行なわれる立山千寿ケ原文部省登山研修所における女性登山研修会の資金に繰入れることが出来ました。どうもありがとうございました。（婦人懇談会委員　斎藤　桂）

会費納入のお願い　会費未納の方が大分あります。早目にお納め下さい。

◇英国山岳会への入会◇

吉沢一郎

一八五七年に創立された英国山岳会は、自分のことを The British Alpine Club と言わず、単に The Alpine Club と称していることは、皆さん既に御承知のことであると思う。

私は昨年一〇月、国際山岳連盟の総会行事が全部終った翌日、即ち一〇月一〇日、かねて文通していたアルパイン・ジャーナルの名誉編集長、アラン・ブラックショーから夕食に招待され、その日の夕方、ホテルから彼の車に乗せられその自宅に連れていかれた。

奥さんの手料理の御馳走が済んでから雑談に移ったが、その時アランが突然、〝ああ、そうだ、How do you like to join our Club? とか何とか言いながら、心よく署名してくれたことは言うまでもない。

バンクーバーからアンカリッジ経由で家に帰えると間もなく、アランから一一月七日付の航空便が来た。

〝もう間もなく貴殿は今度の稔り多い世界旅行からお戻りのことと思います。貴殿がこちらにおられた時にお会いする機会を得たことは何よりも嬉しいことでした。又、余り遠くない将来にお目にかかれることを期待しております。……中略……

尚、 殿が英国山岳会に入会するようお決め下さったことは大変嬉しく思いました。手続きの件、よろしくお願いします。

× × ×

彼がこの督促みたいな手紙をよこしたのは、多分、最近のメンバーシップ・コミティに間に合わせたいという、親切心から出たことであろうと思う。

私が早速、私の山歴、職歴、著書、訳書その他のことを書き入れて、アランのところへ書式一式を送ったのが一一月の二一日であった。帰国してから二週間目である。――それから最後に正式の入会通知が来たのが七月の一〇日であるから、私としては実に二三一日目ということになる。正直言って、こんなに長い間待ち焦れていた手紙は、今までに一度も受取ったことがない。

次に又、アランから二月二八日付の手紙が来た。

〝二月二一日及び二四日付で送って頂いたいろいろの資料有難うございます。貴殿がアメリカ山岳会の会員になられたと聞いて大変嬉しく思います。

われわれの方ではそれよりも多少日数を必要とすると思いますが、貴殿の申込書は二月四日の委員会で承認され、目下通例のように全会員のところへ連絡がしてあります。

従って約六週間後には秘書役からそちらへ入会の件の通知が参ることと思います。(注・AACではこの期間即ち、反対投票締切期間が二週間となっている。二月のACサーキュラーについては次に出てくる。)

× × ×

次に今度はこれに関連してアメリカの John L.J. Hart 氏から手紙が来た。四月一八日付のもので、これには前記のACニュースが親切にも同封してあった。

〝……あなたがAACの正会員になられたこと、あなたの資格がACの会員選考委員会を通過したことを知る手紙は、ロンドン郊外のケントンにいる本屋さんのボーム氏から来た。彼もACの会員であるが、単なる古本屋さんではない。探検家としての又、軍人としての数奇な運命については、いずれどこかで紹介しようと思っている。南海の果てにある、South Georgia 島には、彼の名が正式につけられている氷峰がある、と言ったら、大体の想像はつくかと思う。そのボーム氏からの手紙は三月二四日付となっている。

〝……実は最近のACニュースで、貴殿が英国山岳会の会員になられることを知り喜んでいるところであります。われわれとしては貴殿のような、登山家であり、執筆家でもある優れた方が、われわれの仲間に入られるのを、この上もない名誉のことだと考えております。

しかも貴殿はAACの会員にもなっておられます。本当におめでたいことと思います。

それについて、アルバイン・レジスター(注・A・L・マム著)の(一八五七―六三年)号を、私からささやかな贈物とし、又、貴殿のACへの加入に対する私の尊敬のしるしとしてお受け頂ければ幸甚に存じます。尚、貴殿の入会のお祝いとしては、われわれの会の最も早期の会員録をお持ちになることは、大変ふさわしいことと思うのであります。……

……

× × ×

次に今度はこれに関連してアメリカの John L.J. Hart 氏から手紙が来た。四月一八日付のもので、これには前記のACニュースが親切にも同封してあった。

〝……あなたがAACの正会員になられたこと、あなたの資格がACの会員選考委員会を通過したことをお喜びいたします。その件の記載されている最近のニュースを同封いたしました。(注・それは次のようになっている。)

ALPINE CLUB

February 1969

……

Candidates for Election

The Committee has passed the qualifications of the following:

・Mr. Ichiro Yoshizawa; Proposer N. B. Clinch, Seconded by Alan Blackshaw

・Mr. A. S. Hunt; Proposer R. C. Evans, Seconded by A. Blackshaw

・Mr. A. Strawther; Proposer F. A. W. Schweitzer, Seconded by D. J. Lintott

……

M. H. Westmacott, Honorary Secretary

これに載ったということは、以後に重大な反対(殆んどないと思います)が出て来ない限り、次の委員会で入会が承認されるということでありますので、われわれは間もなく、ACでも仲間になれるということになります。……

× × ×

尚、ハート氏は、AAC、ACの会員であり、コロラド山岳会の重鎮でもある。私達はNYで、F・ウィースナー、本部のマッキー嬢らとクリンチ会長の客となって昼食を共にした。私が時々しているオクスフォードのセント・ジョンズ・カリッジのネクタイは彼から贈られたものである。

次にAC会員の Dick Isherwood 隊長が、H・K遠行の途次、イタリーのトリエステからくれた手紙(六月一六日付)はあとの「八ページ」に紹介してあるが、それには、

〝……私は貴殿が英国山岳会に入会されたことを、名誉秘書のマイク・ウェストマコットから聞きました。お目出とうございます。……

× × ×

私はこの手紙によって、ハハーン、いよいよ本物になって来たわい、と安堵の胸をなでおろしたのであったが、最後に前記のように、七月一〇日、待望の公式の手紙がロンドンから着いた。七月一日付、マイクの署名がしてある。

I wish to inform you that you have been elected a member of the Alpine Club. ……

とあり、同封してあった同日付のマイクの手書きの私信には、

貴殿の、英国山岳会御入会の確認通知が大変遅れてしまったことを深くお詫びいたします。関係委員会の開催の不運なタイミングのズレと、事務局側の事務処理の渋滞が重なって、こんなに遅くなってしまったのであります。

貴殿は昨年のUIAA総会のためにロンドンへ来られた時に、私としばらく話されたことを覚えておられましょう。あそこでお会い出来たことは大変よい思い出となっておりますが、又近いうちに是非当クラブを訪れられることを願っております。

× × ×

これでヤレヤレということで、私もいよいよ世界最古の山岳会に入会出来たことになるのであるが、これは決して私一人の力によるものでないことを充分に承知している。日本の山岳界全体の過去の業績、私がたまたま世界に通用している日本山岳会の副会長という肩書きをもっていたこと、推薦者が

アメリカ山岳会の現会長ニックと、AJの編集長アランであったこと。昨年ロンドンに現われて、多くのプロミネント・マウンテニアズに直接会っていたこと。幸いにして一九六一年に一橋の遠征隊長としてアンデスへ行っていたこと。まあ以上のようなことが重なって今度の幸運を摑んだ、ということになるのではないかと思う。

この意味で私をここまで導いてきて下さった日本山岳会の先輩方、一橋大学の関係者、その他多くの日本の登山家、私の著書や訳書を出してくれた出版社、私の雑文を掲載してくれてきた「山渓」や「岳人」その他の雑誌の関係者、殆んど何もしていないのに私に毎月の食い扶持を出している日本団体生命、その他多くの私の支援者各位に対し、心からなる謝意を表したいと思う。

× × ×

長くなった序でに、もう少し多少皆さんに興味のあると思われることを付け加えておこう。

その一つは**会費**のことである。

・ACの場合

入会金 £4—4—0
年会費 £3—3—0
年報特別装幀費 £0—8—0
計 £7—15—0
(邦価約六七〇〇円)

・AACの場合

入会金 $10
年会費 $15
計 $25
(邦価約九〇〇〇円)

・ACC(カナダ)の場合

入会金 C$10
年会費 C$10 (在外)
計 C$20
(邦価約六七〇〇円)

英国山岳会の会員数について次に述べてみよう。

新らしいのか古いのか知らないが、アランがくれた会員名簿(一九六五年度)の最後の頁をみると、一九六四年一月一日現在六一九名、同年入会者一九名、退会六名、死亡一四名で、差引き一九六五年頭初の会員六一八名、一九六五年入会者で名簿に登載されている者一〇名、同年死亡者六名、従って一九六五年度の会員数は六二二名。前年に比べて三名しか増えていないことになる。

大体毎年入会者が一〇~二〇名、退会と死亡を加えると二〇名。これでは増える訳がない。

名誉会員はこの名簿によると一八名となっているが、リックメルスとクルツが死んでいるので一六名より多くはなっていないと思う。ハント辺りが名誉会員になっていないのは面白い。

英国山岳会は昔から入会が難しいので評判の高いところであるが、どうしてそう増やさないかということについては、その理由を前の「山」に一寸書いておいた。

要するに人数を増やすと事務量が増え、会員サービスが行き届かなくなるという点に絞られると思う。そこへいくと、ドイツその他の山岳会では、会員数も二〇万人などと桁違いに多いが、有給の事務処理者が沢山いるので、サービスの点は行き届いているようである。

(以上)

海外情報

一、アンナプルナIのこと

・G・ハウザーからの便り

御無沙汰していましたが六月三日付けお手紙有難うございました。ドイツ山岳会の百年祭があったので、このところ大変忙しい毎日を送っていました。

しかし近くチンボラソを登るためにエクワドルへ行きます。その前に御質問の各項について急いでお答えを書くつもりです。

先日、アンナプルナI隊が戻って来ました。彼らはロック・ノワール(七五一三m)には登りましたが、天気は非常に良かったのですが、ものすごい強風のためそれから先アンナプルナの東稜を進み続けることが出来ず、何日もテントに閉じ込められていて、中には軽微な凍傷に罹った者もありました。

①"**Mountain**" (No. 3, May 1969)より

クリスチァン・ボニントンが、英国の最強部隊を率いて**アンナIの南壁**(三〇〇〇mという)を登る(一九七〇年)という。

隊員は Christian Bonington(隊長)その他は Dougal Haston, Don Whillans, Ian Clough, Mick Barke, Martin Boysen, Nick Escourt.

これは英国としては一九六二年のヌプッェ以来最も注目すべき遠征隊で、隊員は総て Alpine Climbing Group とACの会員ばかりである。ACGはフランスのGHMやオーストリアのÖAKと同じ性質のもので、超(?)一流登攀家の集まり、ACの中にある。

②ヒンズー・クシュ(一九六九)

・Tirich Mir へ英国陸軍登山協会隊、これは福岡隊と協力する筈のものであった。

・Sararich へ、スコットランドの Norman Tennant 隊。

・英国隊の Lunkho I (6902 m) Ian Rowe の隊にワハン入りの許可が下りたのは珍らしいことだ。ロウと、あとで左足の指を全部凍傷で失った Alan North は、北面からルンコーI(?)に登頂したが、ここには已に、オーストリアとユーゴーの合同隊が西方から登っていたので惜しくも初登は逸してしまった。

尚、同隊の James Tancred と Patrick は Koh-i-Andaval (5639 m)の初登頂をやった。(この項は〝マウンテン〟のNo1より)

③ヒマラヤ(一九六九)

・クルの峻峰 Ali Ratni Tibba (5490 m)へは、エディンバラの Fred Harper 隊が、昨年バタゴニアの Fortress を登った Dave Nicol その他を率いて行く。

・ジョン・タイソンのカン・ジェロワは已に御承知の筈。

・Bhutan・これは女性隊だが山へ登るつもりか。隊員、Monica Jackson, Nancy Smith, Margaret Daval, Mary Stewart.

・**Mt. Everest (1970)** われわれからみるとこれは又妙な報道だが、兎に角そのまま伝えておこう。

日本人が初めてエベレストのスキー滑降を計画したが、彼らは、Roberts/Patterson 組の**南壁国際隊**と合流するため、この計画を放棄した。

このロバーツ隊は当初の構成を変更して、日本、ノルウェー、スイス、オーストリア、アメリカ、イギリスを含め一六人の国際隊となった。

この試みは一九七〇年に実行されるが、もし失敗すれば、ダイレンファースの全米隊が、一九七一年にやろうと、手ぐすねひいて待っている。

・グリーンランド、Malcolm Slessor 隊を含めて三隊

・Tibesti(サハラ)の岩壁へ再び Nottingham Climbers Club の面々。

・エチオピアへ、Dave Gilmore を隊長とする Leeds 大学隊。

〰〰〰〰〰〰〰〰

・ウォディントン峰(四〇四一m)の冬期初登攀

カナダの海岸山脈にあるこの峻峰は、一九三六年にF・H・ウィースナーとW・P・ハウスが初登攀をやり、わが国でも大阪府岳連の斎藤裕二隊が一九六八年に登っているが、今年の二月二二日、アメリカ隊の Allen Steck, Barry Hagen, Dick Culbert が冬期の初登攀を行なった。

登攀隊は Spearmen Col の氷洞を午前五時に出、二二時間かかって登頂、コルには午後一一時に戻った。

岩壁は五〇〇m、他の三人も二日後に同じルートで登頂に成功したという。

・フィッツロイ(三四四一m)の新登頂

第三登、南西バットレスによる初登。一九六八年一一月二〇—二一日。英国隊。Yvon Chouinard, Dick Dorworth, Chris Jones, Lito Tejada-Flores, Doug Thompkins.

(I・Y)

(3ページより)

㉔オラゾダ、Dakura Himalaya (24, 652 ft), Pre monsoon, 1970, 許可時 Aug. 1969

㉕Yugoslav, Annapurna II, Mountaineering Federation of Yugoslavia, Ales Kunaver, Member 11. Post monsoon, 1969, 許可時 Aug. 1969

〰〰〰〰〰〰〰〰

お詫び エベレスト偵察隊報告会が七月十一日の予定で皆さまにお知らせしてありましたが急に七月八日に変更になり、急いで通知を出したのですが日数が尠なかったのと郵便の遅配などで、おいでになれない方や十一日においでになった方もあって大変御迷惑をおかけしまして申しわけありませんでした。お詫び致します。

(集会委員 斎藤 桂)

会員通信

富山ヒマラヤ登山隊

このたび富山ヒマラヤ登山隊はいよいよ出発の運びとなりました。本隊は八月二十一日大阪空港から、後発隊伊東、佐伯は八月二十九日羽田を出発します。カトマンズで入山準備ののち処女峰グルジャ・ヒマール（七一九五メートル）を目指し、九月末にB・Cを設け、約四十日間登山活動してからエベレスト方面へ踏査旅行を行ない来年一月帰国予定です。

皆さまの御支援を深謝いたします。

隊長薬師義美、副隊長伊東信隆、隊員温井正明、金山清一、佐伯友邦、酒井宏征、北日本新聞特派員井上晃、下田健一

シャートルから

松永敏郎

シャートルに根を張ってこのあたりの山をやっております。マウント・レニア、マウント・セントヘレナなども行き、マウント・アダムスでは氷河登攀に相当しごかれました。マウントシュクサンにも登りましたが、眺望のよさにすっかり魅せられました。

エベレストのホーンバインや、ホイテカーに話をきいたり、神戸と合同隊員だったクレンシャウやグリーンなどと山行を共にしましたが、世間知らずの私にはよい勉強になりました。来週はカナダのロブソンの北稜か北壁をやりたいと思っております。

（八月五日、山崎宛）

パミール高原にて

安川茂雄

七月五日あわただしく横浜を発ちました。十日モスクワ、十二日オシュより三六〇〇mのパミールのキャンプ地バゾボイに入山いたしました。ここはすぐ北にピーク・レーニンを望む高原の一角で、フランス、イタリア、ネパール、ドイツ、オーストリアなど世界十四ヵ国のアルピニストたちが集まっております。ドイツからはトニー・ヒーベラーなどの顔もみられます。

ピーク・レーニン山頂の方は若いメンバーにまかせて上田さんと私は水平のみちをあちこち歩いてみようと先日アルテン・マザールというパミール山地の中心地へ行きました。レ・コミニズム、マルクスなどの登山基地です。それにしてもよくもこれだけ山があるものとあきれています。無名峰の多いことも驚ろきで、ゲップが出るほど雪と岩の峻峰群がつらなっています。

日程は八月八日まで、あとピーク・レーニン登頂のサポートをして一応終わります。恐らく再び日本人の入山はむずかしいかにみえます。しっかり山を眺めてくる所存です。また帰りまして御報告申し上げます。

すでにパミールの高原には秋風が吹き始めておりきのう七月二十五日の夜は新雪がありました。しかし東京は猛暑のさなかと拝します。

（七月二十六日　パミール高原にて、山崎宛）

ペルーへ出発

八月二日からおよそ半年間南米のペルーに行ってまいります。妻テレサにとりましては五年ぶりの里帰りです。出発に際しましてはごあいさつにも伺えませんでしたがお許し下さい。

七月三十日

大貫良夫

留守中の連絡先

日本　東京都世田ケ谷区砧町三三一

大貫良一方

ペルー　c/o Sr Y. Tome Av. 28 de Julio 1987—301 La Victoria Lima, Peru

〝アルパイン・ジャーナルのこと〟

A.J. 1968-2 (November) が、日本山岳会の事務所には来ているが、われわれの仲間の購読者のところへはいまだに（七月現在）殆んど届いていない。誰にもその原因がわからない。

そこで私は名誉編集長のアランへ、AC入会通知の御礼の序でに、右の件についてもその理由を説明してくれと頼んでおいた。

七月二〇日付で返事が来たが、詳しい理由は書いてない。しかしもうやがて皆さんの手許に届くことは確かである。その全文をお目にかけよう。

〝Dear Ichiro: 最近の温かいお手紙有難うございました。貴台がいよいよ英国山岳会の会員となられたことを喜んでおります。貴台にとってそれがいつも価値があり、お役に立つことを願っております。

貴台がまだAJ六八（二）を受取っておられないのを遺憾に思います。いくらか厄介な問題が起ったのではありますが、いつもの時期にそれを受取っておられない日本の友人の総ての方に、今はもう送られていると推測しております。貴台の分も確認しておきました。

序でですが、一九六九年号が丁度出来ました。貴台の分は飛行便で送るよう頼みましたので、間もなくお受取りになれるでしょう。

尚、大変興味ある出版物を頂きましたが、それについては別便でお手紙を差上げました。

Alan Blackshaw

（I・Y）

☆海外だより☆

ある英国隊からの便り

イチロー殿

国を出る前に頂いた地図や写真有難うございました。皆大変参考になるものばかりでした。

われわれは今、大陸横断をやりながらパキスタンへ向っているところです。何事も旨くいくといいと思っています。多分七月匆々にはつくでしょう。

われわれは入山の許可だけは手にしていますが、どの山へ入れるのかまだわかっていません。

第一の目的はHKのサラリチで、パキスタン政府に出したわれわれのリストにある山の一つです。しかし、ACマイク・ウェストマコットの言うところによると、この山は二、三年前に日本隊が登っているというのですが、瞭きりしたことを御存知でしょうか。

ツイ峰（IとII）の申請もしてあるのですが、これは他の隊に許可されていることもありそうなので多分ダメでしょう。

そうした場合の次の山は、サラリチの直ぐ北にあるシャゴログと、ヤシンの北に当るガムガル（注・今までダス・バール・ゾームとして知られているもの）なのですが、これらについても御存知なら御教示下さい。

以上の情報については、出来れば左記（ラワルピンディ）のところへ御連絡下さい。

尚、ACの名誉秘書、マイクル・ウエストマコットの話しによると、貴殿は英国山岳会に入会されたとのこと、お喜び申上げます。

この夏が過ぎると私はタイのバンコックにある会社に勤めることになっております。所在地は別記の通りです。そうなれば近い将来日本を訪問して、貴殿にもお会い出来るでしょう。今からそれを楽しみにしております。

トリエステ（イタリー）にて

June 16, 1969 Dick Isherwood

（A. C）

（吉沢宛）

会務報告

臨時理事評議員会

（八月一日、午後七時本会ルーム）

▽出席者　吉沢副会長、大塚、川上、長尾、藤田、野上、村木、小倉、山崎、飯野、原、中島、浜野、松田、辰沼各理事、村山、藤井、金坂、石原各評議員

▽議　事

・エベレスト登山の件　（大塚）

八月中旬、しかるべき交渉員をカトマンズに派遣する。人選についてはエベレスト委員会に一任する。

秋の第二次偵察隊員宮下秀樹隊長以下、別項のとおり八名の隊員を決定する。

・ヒラリー卿来日の件　（松田）

工峰第二次偵察隊員決定

エベレスト第二次偵察隊員は次の八名と決定、八月二十日、本隊が羽田を出発した。

▽隊長

宮下秀樹（三十八歳）慶大OB、一九五九年慶大ダウラギリ偵察隊、六〇年慶大ヒマルチュリ隊隊員

▽副隊長

田辺寿（三十七歳）慶大OB、一九五九年日本山岳会ヒマルチュリ隊隊員六〇年慶大ヒマルチュリ隊隊員

▽隊員
中島寛（三十一歳）一橋大OB、一九六一年一橋大ベルー・アンデス隊隊員、総務担当
植村直己（二十八歳）明大OB、日本山岳会第一次エベレスト偵察隊、一九六五年明大ゴジュンバカン隊員、南米アコンカグア、キリマンジャロ、アラスカ・サンフォードを単独登頂。食糧担当
佐藤之敏（二十六歳）一橋大OB、一九六五年、六七年一橋大ヒンズークシ登山隊員、渉外担当
小西政継（三十一歳）一九六七年マッターホルン北壁冬期登攀。装備担当
井上治郎（二十四歳）京大OB、一九六八年京大パタゴニア学術調査隊員
気象担当
大森薫雄（三十五歳）慈恵大OB、医療担当

図書室便り（昭・44・7）

新刊図書受入報告

あかね書房寄贈
(1)ベルナール・ビュール著・近藤等訳『わが青春の山々』昭・44・6
(2)安川茂雄著『近代日本登山史』昭・44・6
(3)バール・バウァー著・横川文雄訳『ナンガ・パルバート登攀史』（ヒマラヤ名著全集 8）昭・44・7

山と溪谷社寄贈
(1)山と溪谷社編『日本の山』（山溪カラーデラックス）昭・44・8

実業之日本社寄贈
(1)日本山岳会編著『アルプス縦走—44年版—』（ブルーガイドブックス 17）昭・44・7

大垣市ヒマラヤ委員会寄贈
(1)大垣市ヒマラヤ委員会編『シャー・イ・アンジュマン登頂』昭・44・7

大垣市役所保健体育課刊
泉州山岳会寄贈
(1)泉州山岳会編『葛城—明神岳遭難追悼号—』昭・44・5

安川茂雄氏寄贈
(1)安川茂雄著『近代日本登山史』（限定百部之番外九）昭・44・6 あかね書房刊

鳥見迅彦氏寄贈
(1)鳥見迅彦著『詩集 なだれみち』昭・44・5 創文社刊

伊倉剛三氏寄贈
(1)諸橋轍次著『大漢和辞典』全十二巻・索引一巻 昭・41・5—43・5 大修館書店刊

定期刊行物受入報告

〔部報・会報類〕
(1)『あしなか』No. 116 (44—6)
(2)『兵庫山岳』No. 26 (44—7)
(3)『京都山岳』No. 530～531 (44—7～8)
(4)『日本ネパール文化協会会報』No. 4 (44—6)
(5)『Nepal』No. 1 (44—6)
(6)『R・C・C時報』No. 14 (44—6)
(7)『山嶺』No. 471 (44—7)
(8)『札幌山の会年報』第一年
(9)『自然保護』No. 85 (44—6)
(10)『山』No. 6～7 (44—6～7)
(11)『山と雪』No. 135 (44—7)

〔山岳雑誌〕
(1)『アルプス』No. 137 (44—7)
(2)『岳人』No. 266 (44—8)
(3)『HIKER』No. 166 (44—8)
(4)『山と溪谷』No. 371 (44—8)

〔その他〕
(1)京都山岳会『北・中・南米17ヵ国（三万キロ）踏査とアンデス登山隊1970』
(2)横手美入野岳友会『玉山・雪山登山報告書 1968～69』
(3)富山ヒマラヤ委員会『'69ネパール・ヒマラヤ登山計画書』
(4)慶応大学山岳部『1970年ネパール・ヒマラヤ登山計画書』
(5)八幡製鉄所山岳部OB会『キナバル山登山報告書 '68』
(6)新潟県山岳協会『夏山の知恵 1969』
(7)岩友会『ネパールヒマラヤ遠征隊報』

〔バック・ナンバー欠号受入報告〕
東京野歩路会寄贈
(1)『山嶺』No. 463 (43—11) No. 470 (44—7)

日本山岳協会寄贈
(1)『日本山岳協会会報』No. 7～8 (43—3～5) No. 12 (44—3)

Journals Arrived in July 1969

1. 『Die Alpen』Jahrgang 45, Quartal 2, 1969.
2. 『Die Alpen』Jahrgang 45, No. 6, Juni 1969.
3. 『Appalachia Bulletin』vol. 35, No. 6—7, May-June 1969.
4. 『Chicago Mountaineering Club the Newsletter』vol. 23, No. 2
5. 『The Geographical Journal』vol. 135, Part I, March 1969.
6. 『Mountain』No. 3, May 1969.
7. 『Mountaineering』vol. 5, No. 5, Spring 1969
8. 『Ostrreichische Alpenzeitung』Jahrgang 87, Folge 1364, Marz/April 1969.
9. 『Rivista Mensile』Anno 90, No. 4, Marzo-Aprile 1969.

このたび、左記の雑誌を名誉会員松方三郎氏より寄贈いただきましたので報告致します。

(1)『Die Alpen』1925～1948
(2)『Geographycal Journal』1926 (LXⅧ 5, 6)
1927～1940（内欠号 1932 LXXX 6)
1951～1961（内欠号 1951 part 1)
1962～1966
1917 XLX 1 (Jan.)
1918 LI 3 (Mar.) 6 (June.) LII 3 (Sept.) 4 (Oct.)
1919 LIV 4 (Oct.)
1922 LX 6 (Dec.)
1925 LXVI 4 (Oct.)

なお左記の参考図書を備えましたので、充分ご活用ください。

(1)小学館編『世界原色百科事典別冊）昭・43・12 小学館刊

図書委員会報告（7・15）

野上、大橋、細井、丸山、武田、川上、村石

(1)図書交換即売会の件
第二回図書交換即売会を十月二十五日（土）午後四時～六時まで、本会ルームにおいて催す。
(2)記事索引の件
『雪崩』の記事に関して索引作製をすすめている。（川上委員）
(3)かねてより話のあった松方氏よりの寄贈図書がルームに届いた。（野上理事）

(P・S) NO_2

ようやくしのぎやすくなってまいりました。あの、魚屋の前の大きな水槽の中で、暑気あたりをわずらってヤケをおこしていたウナギたちは、どこへ行ったのやらすっかり姿をひそめてしまいました。

十月二十五日に決定しました図書交換即売会は、皆さまのお手持ちの本で不要のものを出品していただいて、集まったものの中からまたご入用の本を探してお買上げいただく——要するに図書交換の場所です。当日は、是非ルームへお立寄りくださいませ。また、出品いただけるものがございましたら、ご連絡いただけたら幸いです。

（満）

昭和44年度除籍者

左記の会員は、会費を昭和40・41・42・43・44年の五ヵ年間滞納のため、定款第十一条の規定により、本会台帳より除籍されました。復活御希望の方がありましたら、その手続きをとられますようお願い致します。

◇ ◇ ◇

三四三八 堀川たね子
四〇九六 伊藤 敞
四六四六 森川 由雄
四八七九 石川 正夫
四八八三 酒井 省二
五〇六九 金子 賢三
五六三三 甘利 仁朗
五七二一 山本 康博
五七二二 西村 豪
五七七〇 柴辻 紀子
五八五一 野村 光由
五八七一 小林 稔明
四三八五 北川 正次（宮城支部）
四〇三九 原町高校山岳部（福島支部）
四七三六 阿部 三郎（〃）
五六九九 赤井 秀雄（福島支部）
五一六八 小林 収（越後支部）
四三五八 沖 武（信濃支部）
四六五九 百瀬 寿雄（〃）
二八九〇 高室陽二郎（山梨支部）
五七八三 市川 定六（〃）
五六一七 居林 陽（東海支部）
五六二〇 高木 貞彦（〃）
五七八七 川本 貞次（〃）
五七八八 箕岡 三穂（〃）
五三三一 守山進太郎（関西支部）
四六八一 遠矢 義弘（福岡支部）
四八九〇 今村 茂（〃）
五〇〇二 浦田 勝（〃）
五一一一 行島 又蔵（東九州支部）
四八九一 飯村 一猛
四八九七 鎌野 敏雄

ルーム日誌（44・7月）

2日（水）エベレスト委員会
日ネ協会ネパール語講習会
3日（木）定例理事評議員会
学生部女子部会合
9日（水）海外連絡委員会
日ネ協会ネパール語講習会
10日（木）エベレスト委員会
11日（金）集会委員会
15日（火）図書委員会
婦人懇談会立山研修準備委員会
16日（水）日ネ協会ネパール語講習会
17日（木）婦人懇談会主催ビールパーティー
21日（月）常務理事会
23日（水）日ネ協会ネパール語講習会
25日（金）北大山の会
婦人懇談会立山研修準備委員会
30日（水）日ネ協会ネパール語講習会
31日（木）婦人懇談会委員会
エベレスト委員会
七月中来室者　七一八名

山梨支部総会（44・6・22）

支部役員ならびに事務所変更
役　員
▽支部長　三井松男
▽委員長　斎藤俊哉
▽常務委員（企画）遠藤靖彦、（記録）田村英也、（庶務）山村正光、（会計）日本　伸
▽委員　今沢寛、山本色子、柳沢憲、高野洋志雄、石垣政雄、山岸靖彦
▽監事　窪川五郎、松尾寿
▽評議員　岩間升、高室陽二郎、小田年友蔵、芦沢俊雄、望月雅郎、石塚正明、二塚謙三、田中義元
▽顧問　大沼伊三郎、百瀬舜太郎、今井友之助、山梨岳連会長
山梨支部事務所　甲府市武田三丁目六―二七　山村正光方（〇五五二）三五―〇二六五

関西支部総会（44・6・27）

新役員
▽支部長　今西寿雄
▽委員　梶本徳次郎、大賀寿二、松丸秀夫、阿部和行、住吉仙也、野村哲也、宗実慶子、平林克敏、桑田結、金井健二、白石裕、林茂、清原鉄也、久野英一郎、竹内通雄
▽監事　二木信次、水野政博
▽評議員は一九六八年度選出、任期三年のため留任

「山岳」63年写真説明の訂正

同書対一二五ページの赤石岳山頂での記念写真の説明に誤りがあるのを、三枝守博氏が指摘されましたので、訂正致します。
右端＝高野鷹蔵氏は三枝守博氏の誤り、また撮影者を三枝氏としたのは高野氏の誤りでした。また三枝氏の左隣りは高頭氏が伴った従者で、鉄砲をかついでいるのが案内人中村宗平であろうと、三枝氏は言われています。
（望月）

なお、文中のカットは坂本直行氏の作品ですが、説明がもれておりますので、お詫びかたがたお知らせします。
（中島）

ネパール訪問報告

八月一日の臨時理事評議員会の決定により、エベレスト委員会は、今西寿雄評議員（関西支部長）、大塚博美常隊理事両氏を、本会の一九七〇年プレモンスーンの本隊ならびに第二次偵察隊の許可確認方のためにカトマンズに派遣した。概要は次の通り。

八月十五日、ＰＡＡ一便、一七・三〇羽田発、バンコック経由で翌十六日一五・三〇カトマンズ到着、アンナプルナ投宿、先発隊員佐藤之敏君の報告をきく。

翌十七日から二十日までの四日間、モンスーン開け切らぬ雨のカトマンズの官庁めぐりに終始した。

当然のことながら日本大使館を訪問、吉良大使初め館員の皆さんに挨拶、八月五日付にて正式許可（本隊ならびに第二次偵察隊）について大使のご尽力についてお礼を述べる。今西さんと同郷のことも含めマナスルの初登頂者、ネパール万博館の建設会社々長など、深い因果関係に話しがはずみ、大使からも今度の許可についての祝辞と、二隊が無事に事業を達成されるよう希望が述べられた。

ネパールの官庁筋では、外務省儀典局長リマール、登山担当シン、係マナンダール、前登山担当シルワル（現国連担当）、外務次官補ミセス・シャハ、次駐日大使タクール、日本大使パンダリーの実弟―またネパールの万博委員

であり、マナスル以来の顔なじみクリシュナ・バハドゥール・ベルマ氏にも政府直営の民芸土産館で会った。

これらのところで挨拶と共に、許可の確認を行なったが、問題はなく、政府筋も本会のエベレスト登山について祝辞を述べてくれた。

ヒマラヤン・ソサイティにも足を運び、事務局長格のパラシュリ氏、シェルパの親分格のブードルジェ（雪男探検隊の時小生と一緒）にも会ったが、本会の隊とスキー隊がネパールに来ることを大いに歓迎するし、シェルパ仲間ではトラブルの心配は全然ないと強く断言していた。

八月二十一日、第二次偵察隊は、雨の切れ間にニューデリー経由でカトマンズに飛来した。元気な一同をシャンカーホテルに案内し、種々引継ぎ打合せを行なって任務を終了した。帰国は二十三日午後十一時三十分であった。

（大塚博美）

ネパール研究の集い

日・ネ協会では次の通り本会会議室でネパール研究の集いを四回開催します。本会々員も参加できますので、興味をおもちの方はご参加下さい。なお会費は日・ネ協会々員と同様毎回五〇円です。

▽九月十二日（金）六・三〇―八・三〇
「地質学上よりみたネパール」
（講師）北大地質学教室在田一則氏

▽九月十九日（金）六・三〇―八・三〇
「ネパールの経済開発」
（講師）アジア生産性本部
A.K. Upadhyaya氏

▽九月二十六日（金）六・三〇―八・三〇
「考古学上よりみたネパール
―カピラ城趾発掘を中心として」
（講師）立正大学講師　坂詰秀一氏

▽一〇月三日（金）六・三〇―八・三〇
「カトマンズ盆地の文化と社会」
（講師）東大人類学教室　石井淳氏

あとがき　山への御寄稿は必ず原稿月紙へ縦書でお願いします。原稿に原則として返却いたしません。八月上旬豪雨で婦人部の岡部浩子さんが黒部で消息を断ちまだ不明です。何か手掛りでもあればとお祈りします。（山崎）

昭和四十四年九月十日発行
東京都千代田区神田錦町
三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

☆会報製本御引受け☆
製本代　（201号～250号）金600円也
送料　別受け　金120円也
中林製本手帳株式会社
東京店・文京区水道2～15，電話（943）0311（代表）
大阪店・都島区相生町7，電話（352）3491（代表）
名古屋店・昭和区雪見町1～15，電話（731）7331（代表）
工場：大阪工場（堺市），東京工場（戸田町）
▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀